

2020年8月15日

第41回国際幼児教育学会はweb開催となりました。絵本部会は、戦後75年間幼児期の平和教育においても先駆的かつ中心的な役割を担ってきた広島の子どもの活動の柱にし『平和と絵本』というテーマで、対話を重視したワークショップを山田千明会員を中心に企画していました。ところが演劇や演奏会と同じように感染リスクが高いことが懸念され、やむなく中止となりました。

今日、戦争の語り部が高齢化し、被爆者の平均年齢は83歳を超えました。戦争体験を肉声で伝えること、子どもたちに戦争で失われる命や生活の尊さが伝わること双方が難しくなっていくと懸念されるなか、新たな挑戦も生まれています。

語り継ぐ手立て「伝える」方法は多様になり、紙芝居や絵本、さらに漫画やアニメにと、広がりを見せています。『この世界の片隅に』（この史代漫画原作・コミックシーモア/片渕須直監督・脚本 2016年公開）をご覧になった方も多いことでしょう。

『ヒロシマ消えた家族』（指田和著 鈴木六郎写真/ポプラ社 2019年）は原爆で一家全滅した家族のアルバムから生まれたリアルな絵本です。3歳9歳11歳で命が失われたきょうだい。犬も猫も家族。子どもたちが遊び学ぶ、その満面の笑みと充実した表情を撮り続けたのは父親でした。写真だけ生き延びたのは、家財と一緒に疎開させていたからでした。1歳の子どもの写真はありません。

これらの作品が共感されるのは、死と隣合わせの戦時下、子どもからお年寄りまで市井の人々が粛々と明るく生きる確かな息遣いが伝わるからでしょう。

暴力、軍事力、権力とは異なる、根っこのあるこの生きる力は、老若男女問わず、国内外を問わず、人間の良心を、平和という希望へと誘います。一隅で暮らす人々には戦争中といえども細やかな五感を働かせる心のゆとり、精神の豊かさが、確とあったことが伝わってきます。

また以下の作品に共通するのは、戦争で殺され痛めつけられたのは人間だけではない。この世に存在するすべてが生きる居場所をもっているという優しいしかも凜とした気づきではないでしょうか。作品の創作者にも受け取る側にも繊細な感性が求められます。掛け替えのない「いま・ここ」が子どもたちの心に「伝わる」には、大人の「伝えよう」という強い平和への関心と、子どもに寄り添って読み合う、あせらないあきらめない長い時間がいらします。

『きつときこえるよ』（文藤原美香・村本美香/絵瀧川裕恵/ダブルミカ 2019年）は被爆樹木を題材とした平和絵本です。樹の多くが爆心地の方向に傾いています。なぜでしょう。樹木たちの力強さを光の中に美しく描いています。『旅するピカドンピアノ』（作まほろば遊/絵姿陽炎/三恵社 2020年）は被爆したピアノを調律し蘇生し、それを携え世界をめぐる「平和のピアノ」朗読&コンサートをしている実話絵本。『ちっちゃいこえ』（脚本アーサー・ビナード/絵丸木俊・丸木位里「原爆の囀」より/童心社 2019年）は紙芝居。猫のクロが〈サイボウの声が聞こえますか〉と問いかけます。

新型コロナウイルスはパスポートなしに国境を越えますが、ワクチン開発には自国優先という高い国境が立ちふさがっています。感染をめぐる目に見えない戦争も、子どもを除けてはくれません。マスクが防災頭巾に見えてくるこの頃です。（宮地記）